て本物の牛が引く牛車が２台、馬が８頭使われた行列を中尊寺の境内で見、鎌倉時代へのタイムトンネルに入ったような気分になりました。

山本賢君

樋口金占君　ＢＯＸに協力。

村山誠一君

丸山誠一君　三条ミュージックキャンプ＆選抜バンドコンサートの成功を祈って！

笹原勝治君　若槻さんおいそがしい中ありがとうございました。

堀川正幸君　ボックスに協力。

江口悟君　久しぶりのホームクラブです。

米山忠俊君　ゴールデンウィーク家族で東北の旅をたっぷり楽しんで来ました。

卓　　話：

１．はじめに

貴重なお時間をいただいて、大悟大徹された不世出の名僧と、まったくちっぽけな無名な「私」とでは、お与えいただいた主題は、文字どおり「月とスッポン」の感を強くいたしています。しかも、つい先日、畏敬いたしております良寛研究家の玉木哲先生の労作、『越後三条良寛のみち』をご鑑賞いただいたとのことでありますので、さらに蛇足を申し述べるものを持たないのが本音です。名僧良寛については、いろいろな人たちが、いろいろな文献や、いわゆる良寛グッズと称される類いのもので、鵜の目鷹の目で良寛さまを売り込んでいます。良寛さまは余りにも傑物なために、いろいろな人が、いろいろ書いてはいるものの、これが良寛だといった、良寛の真髄に触れることが大変困難なのが実情なのではないでしょうか。こんな状況の中で、お与えいただいた主題について、盲人が象をなでる心地で良寛さまによせる思いを吐露させていただく気持ちに、いまなっていますのも良寛さまからいただいた大切なご縁だとも考えられるものであります。

２．良寛さまと三条

ことしは良寛没後160年ということです。きょうまで新潟伊勢丹で、.良寛遺墨90点と多くの良寛敬慕者の書や絵画など50点ほどを展示した「没後160年良寛展」が開催されています。この後、岡山・大阪で開催とのことですが、天保２年（1831）１月６日、74歳で死去された良寛さま。その２年２カ月ほど前の文政11年11月12日朝、三条地震が発生。町中いたるところ阿鼻叫喚の地獄絵を現出しました。被害は越後11藩に及び、震源地に近い三条の被災は激甚で、その滅亡が流布されたほどでした。良寛さまと親交の厚かった東裏館の宝塔院の隠居、隆全和尚に当てられた地震にまつわる消息文が、和島村島崎の良寛終えんの地木村家に遺されています。たまたまこの12日、全国の良寛敬慕者の集まりである全国良寛会の総会が三条で開催されるとのことで、この日に間に合せたい

と、この良寛書簡をいしぶみにして、三条地震ゆかりの地震亡霊塔の前に建立される由です。宝塔院の現住とご隠居の悲願だったようですが、このいしぶみの原本は、木村家の諒解を得て、玉木先生がビデオ撮影のために収録されていた写真をもとに彫まれたものと聞いています。地震の安否をたずねられた良寛書簡に、分水町渡部の庄屋で酒造業を営んだ阿部定珍に宛てられたプリント収録のものがあります。良寛書簡のまたいとこに当たる与板の町の年寄りで酒造業の山田杜皐に宛てられた書簡が、新潟の良寛展に展示されていました。縦16cm、横55cmほどの手紙で、「地しんは信に大変に候。野僧草庵は何事なく、親るい中死人もなく、めで度存候。うちつけにしなばしなずてながらへてかかるうきめをみるがはびしさ　しかし災難に逢がよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候。かしこ臘八　良寛　山田杜皐老　良寛　与板」自然の摂理に叶うことが、身をたもつもとだと教えているように思います。良寛は、地震後の惨状を目で確かめずには居れず、71歳の老軀をおして三条まで足を運び、惨状に涙されたものでした。人の痛みを自分の痛みにする。自分と他人、子どもと大人といった、物を二つに見ない、差別しない、釈迦の教えをそのままに生きた偉大な人物であったとみることができるように思います。

3．人間の本来的な生き方

ご案内のとおり、良寛さまは一生托鉢しながら農村を廻り歩き、あるときは子どもたちと手まりをついたり、かくれんぼをしたり無邪気に遊びもしました。あるときは庵にこもって和歌や漢詩を飄々として清貧に暮らし、その浮世ばなれの行状は常人には、とても理解できないものがあります。その奇行や逸話が、非常に親しみ慕われながら今日まで語りつがれてきました。良寛さま51歳の年、文化５年（1808）夏、71歳で亡くなった有願和尚もまた、良寛さまが師と仰がれて傑物でした。有願は、代官島の庄屋田沢家に生まれ、幼い頃出家し、江戸・姫路・佐賀などで修行されたとつたえられています。絵や詩歌、書にすぐれ、良寛とは早くから交際があったようです。晩年、新飯田の円通庵（別称田面庵）に住し、自由な生活を送り、村民のために力を尽くしたとつたえられています。逸話も多く、頭のはげた丸顔の大男だった有願と、やせて背の高い良寛と一緒にいる姿は、滑稽だったともうします。道端で行き倒れの乞食を弔い、その持物であった椀の飯を、有願と良寛が分け合って食べたという逸話があります。幼い時、宝塔院に寝泊りして、隆全和尚に読み書きを習った西蒲牧が花の旧家、解良栄重の書き遺した『良寛禅師奇話』に、国上の草庵におられた頃の逸話として、次のようなものがあります。良寛さまは、炉の隅に小壷を置き、それに醤油をいれ、托鉢などで貰った食べ残りは、その壷にいれる。醤油漬けにして貯蔵されたのでしょう。しかし、暑い時節には小さな虫がたくさんわいてくる。来訪者があればそれを「人ニモ進ム」とあります。人は見ただけでご免こうむったことでしょう。良寛さまは変な臭いのする、えたいの知れないものをただ騰々として食べていたのです。お椀に盛れば虫の方から逃げていくわいといって、少しも気にする風もなかったとのこと。いかに良寛さまでも、臭いものを好んで食べたわけではありません。おいしいものを食べれば嬉しかったでしょう。現に、良寛さまを敬慕した三条文人の一人、菓子屋の三浦屋幸助の銘菓、「都ようかん」は大好物でした。良寛さまは決して物を粗末にされま